

参考資料

分類名〔病害虫〕

参 7	アカスジカスミカメの多発条件下における殺虫剤による 茎葉散布処理の効果（追補）
-----	--

宮城県古川農業試験場

## 要約

イヌホタルイの発生によりアカスジカスミカメが多発した条件下において、スルホキサフロル水和剤（2,000倍）のアカスジカスミカメに対する防除効果は、散布7日後まで高く、散布20日後まで認められる。また、斑点米発生率に対しても防除効果が認められる。

## 1 取り上げた理由

アカスジカスミカメは、本県の斑点米カメムシ類の最重要種であり、水田内雑草のイヌホタルイ発生水田において多発し、斑点米被害を増加させる。本種に対する主要な殺虫剤の防除効果については、「アカスジカスミカメの多発条件下における殺虫剤による茎葉散布処理の効果」（普及に移す技術第93号）において明らかにした。平成29年に新規殺虫剤スルホキサフロル水和剤が農薬登録されたことから、既存の殺虫剤との比較により、本剤のアカスジカスミカメに対する防除効果を明らかにしたので参考資料とする。

## 2 参考資料

- (1) アカスジカスミカメに対するスルホキサフロル水和剤（2,000倍）の防除効果は、散布7日後まで高く、散布20日後まで認められることから、エチプロール水和剤（1,000倍）と同程度である（表1、図1）。供試薬剤においては、ジノテフラン液剤（1,000倍）の防除効果が散布12日後まで高く、特に残効性に優れる。また、エチプロール水和剤（2,000倍）については、散布20日後の防除効果は認められるがその程度は低くなり、残効性がやや低い。
- (2) 頂部加害による斑点米発生率に対して、スルホキサフロル水和剤（2,000倍）の防除効果は、ジノテフラン液剤（1,000倍）やエチプロール水和剤（1,000倍、2,000倍）と同様に認められる（表2、図2）。側部加害に対するスルホキサフロル水和剤（2,000倍）の防除効果は、ジノテフラン液剤（1,000倍）と同様に高く、エチプロール水和剤（1,000倍、2,000倍）よりも高い。

表1 アカスジカスミカメに対する殺虫剤の防除効果

殺虫剤	希釈 倍数	補正密度指数				効果の判定			
		散布4日後	散布7日後	散布12日後	散布20日後	散布4日後	散布7日後	散布12日後	散布20日後
スルホキサフロル	2,000倍	3.1	0.0	12.8	21.7	A	A	B	B
ジノテフラン	1,000倍	2.2	4.2	2.7	12.2	A	A	A	B
エチプロール	1,000倍	2.5	0.0	15.0	23.4	A	A	B	B
	2,000倍	3.5	4.4	21.0	40.8	A	A	B	C

注)効果の判定基準 A:効果は高い(補正密度指数10以下), B:効果はある(同10~30), C:効果は認められるが、その程度は低い(同30~50), D:効果は低い(同50以上)。

表2 斑点米発生率に対する殺虫剤の防除効果

殺虫剤	希釈 倍数	無処理比			効果の判定		
		頂部加害	側部加害	合計	頂部加害	側部加害	合計
スルホキサフロル	2,000倍	14.2	8.8	13.5	B	A	B
ジノテフラン	1,000倍	16.0	4.4	14.5	B	A	B
エチプロール	1,000倍	13.3	14.2	13.4	B	B	B
	2,000倍	13.8	47.8	18.1	B	C	B

注)効果の判定基準 A:効果は高い(無処理比10以下), B:効果はある(同10~30), C:効果は認められるが, その程度は低い(同30~50), D:効果は低い(同50以上).

### 3 利活用の留意点

- (1) イヌホタルイ等の水田内雑草が発生し、アカスジカスミカメが多発した条件下において、殺虫剤を選択する際に活用する。供試薬剤の残効性については、ジノテフラン液剤（1,000倍）、スルホキサフロル水和剤（2,000倍）、エチプロール水和剤（1,000倍）、エチプロール水和剤（2,000倍）の順に高い。
- (2) 本試験で使用した殺虫剤の商品名は下記のとおりである。散布液量は、いずれの供試薬剤も100L/10aである。
  - イ スルホキサフロル水和剤：エクシードフロアブル
  - ロ ジノテフラン液剤：スタークルメイト液剤10
  - ハ エチプロール水和剤：キラップフロアブル
- (3) 本試験の殺虫剤の散布時期と散布回数は、穂揃期6日後の1回であるが、イヌホタルイが発生した水田における殺虫剤散布は、1回目を「出穂期から穂揃期」、2回目を「穂揃7日後」に行う。
- (4) 本試験は、イヌホタルイの多発条件下で実施したものであり、各区のイヌホタルイ平均穂数558~651本/m<sup>2</sup>である。

(問い合わせ先：宮城県古川農業試験場 作物環境部 電話0229-26-5100)

#### 4 背景となった主要な試験研究の概要

- (1) 試験研究課題名及び研究期間  
農薬安全使用指導事業（平成30年度）
- (2) 参考データ

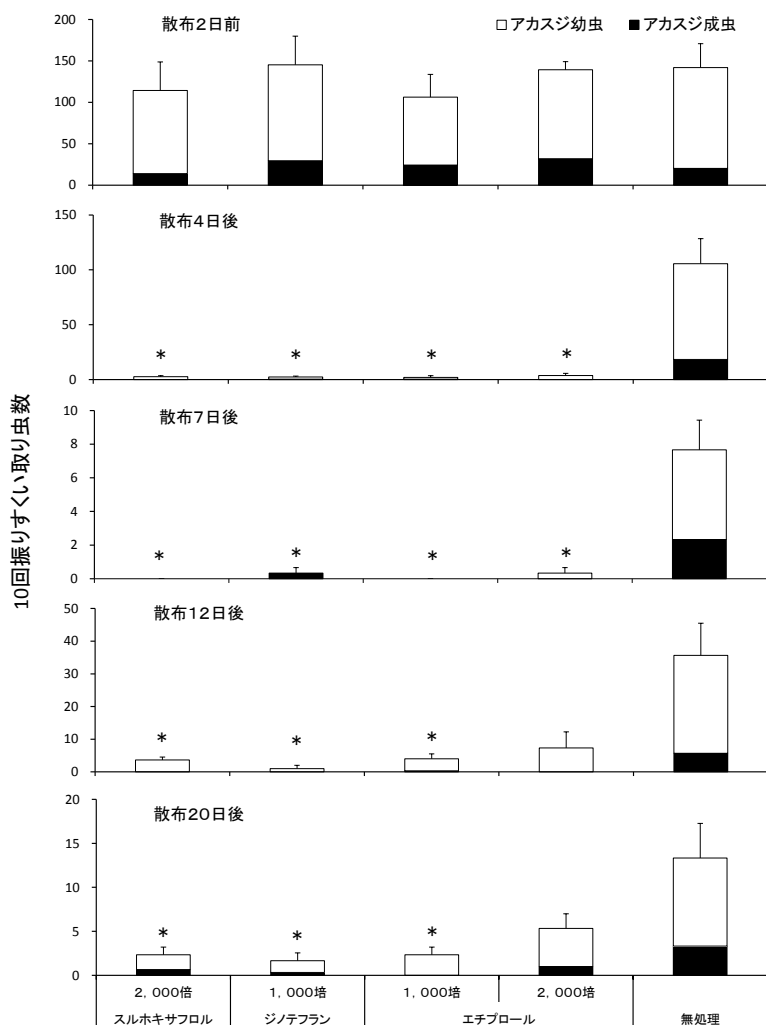


図1 アカスジカスミカメの発生密度に対する薬剤散布の効果

注) \*は、無処理との間に有意差が認められた（対数変換値，Dunnett's test,  $p < 0.05$ ）。

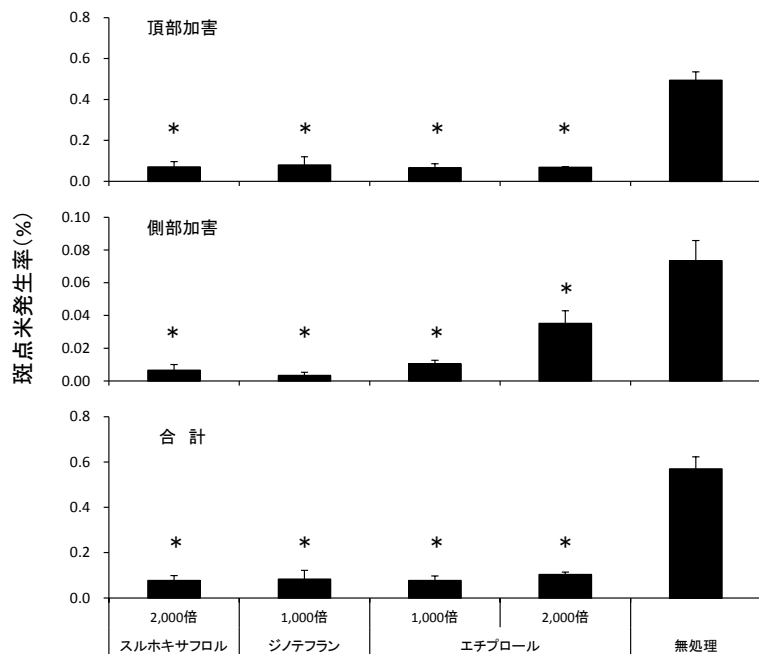


図2 斑点米発生率に対する薬剤散布の効果

注) \*は、無処理との間に有意差が認められた（逆正弦変換値，Dunnett's test,  $p < 0.05$ ）。

(3) 発表論文等

イ 関連する普及に移す技術

- (イ) イヌホタルイの発生がアカスジカスミカメ被害に及ぼす影響（第81号参考資料）
- (ロ) イヌホタルイ発生水田におけるアカスジカスミカメの防除適期（第83号参考資料）
- (ハ) イヌホタルイ発生量に基づく斑点米被害リスク評価（第88号参考資料）
- (ヘ) アカスジカスミカメの多発条件下における殺虫剤による茎葉散布処理の効果（第93号参考資料）

ロ その他

(4) 共同研究機関